

# 幼兒の運動遊戯 (三)

堀 七 藏

一

幼兒の生活は凡て遊戯であることは何人も否定出来ない。只仰向にねころがされてゐる嬰兒でも手を動かし、足をバタ／＼させて満足し、光るものを眺めから／＼する音をきいて喜んでゐる。歩行が出来るやうになつた幼兒でも、めがさめると食ふか飲むかする以外はとんだりはねたり一時も休息することなく、朝から晩まで遊んでゐる。疲れると眠り、眠からさめると玩具で遊び、人形と話し、木の葉や石片を相手として獨り遊びをなすものである。更に遊び友達を要する頃になつても朝から晩までいろいろの遊びをなしてその生活を充實させてゐるのである。若し幼兒の生活から遊びを取除けば残るものは只生理作用が行はれ、睡眠休息だけとなるものである。幼兒の生活は實に遊びの生活である。この遊びにつきジョンソンの遊戯及び競技による教育中から上野陽一氏は次のやうに紹介してゐる。

一、嬰兒期 (〇—三歳)

嬰兒期に特有なる遊びは感覺的及び運動的の試みである。皮膚感覺・視覺・聽覺・嗅覺・味覺の器官を刺戟するやうなものならば外物は勿論、自分の身體の一部分までもその目的のために用ひる。握る・引く・おす・吸ふ・味ふ・落す・摘み上げる・ヨチ／＼歩く・木上りをする・走る・揺する・捜す。

更にこの期の終りになると簡單な模倣的描寫的活動その他似よつた反應を營む。これ等は皆筋肉や感覺器官を適當に働かして快感を齎らすものである。

遊戲が主で競技といふものはない。遊戲にも一定の形式がなく興味は多様で散逸し易い。

又主として玩具の時代である。メージョアは四十五分間に一嬰兒の行つたことを觀察叙述してゐるが、それを見るとこの期に於ける遊びが如何なる性質のものであるかが分る。實にこの期に於ては玩具が嬰兒の時間と勢力との全體を吸収してゐるといつてもよい。「ゐない／＼ばー」「ちよちちよちあわ／＼」や「おつむてん／＼」の如きものはこの時期から幾分遊び仲間を要求してゐることの證據になる。尤もこの時代は後の時期ほどには仲間を要求してゐない。その仲間といふのも、それによつて何物かを得ようとするのが主で、仲間に對して何物かを與へるといふことはない。即ち愛他的の社會的衝動によつて仲間を求めるとではない。この期に兒童の營む活動は殆ど全く個人的、自己中心的、或は利己的である。而してその結果として感覺的能力と基本筋とが發達して行くのである。

前期に於ける兒童の活動は引きつゞき今期に繼續せられ精練され完成されて行く。この期に於ても嬰兒時代と同じく遊びそのもの、活動そのものが目的であつて、それによつて何か他の目的を達しようといふやうなことはない。しかしこの期に於ては想像も次第に活動を始め、模倣も重要な位置を占めるやうになるから簡単な劇的の遊びと描寫的の遊びとが多くなつて来る。

仲間を欲する念も増加する一方には個人的の欲望も強くなり一人の遊び仲間があるとそこに競争が起つて来る。一方仲間を求むの念は益々強くなり、仲間と共に遊ぶおかげで言語も發達し、利己心を抑へ、十分に社會化して行く途が開ける。

この期に於てもおもちゃ遊びは子供の生活の一半を占めてゐる。しかしその遊び方を見ると大きな筋を支配する力が次第に發達し、何か或目的を立て、それに達するために努力するやうになる。尤も興味は移り易く、困難な目的を達するために辛抱するといふことがない。或目的を達するために一時間又は一日の間熱中してゐても次の時間又は次の日にはそれを忘れて他の目的に走つてゐることがある。之に反し若し子供の周圍の事情に變化がない場合には幼稚園時代の子供が極めて簡單なる遊びを幾週間もつゞいで飽きずにゐることがある。

又好奇本能の發達と共に種々の疑問を提出する時期であるから、そのために多くの遊戯的活動に形式を興へ、之を刺戟し活躍せしめ、心身の活動を促し、その發達を來すことになる。心身の發達を測定す

るには遊戯の性質の變化を見て推察するのが一番よゝ。

### 三、兒童後期（八——一二歳）

この期は心身共に再順應の時期であり過渡期である。生長は前の時期及この後の時期よりも遅い。殊にこの期の後半は身體的には安定の増す時である。即ち腦は殆どその成熟した形に達し、その機能が急に進歩しつゝある時である。この期の終りになると勢力も活力も間斷なく増して行くから異常の疲労も減じ、疲労し易い性質も少くなる。この時代が兒童の生活中最も活動的の時期であつて、この時期ほど澤山の遊戯を行ふ時はない。好奇の傾向は益々甚しく人や物について絶えず質問が行はれる。想像は活動的であるけれども調整され、前から見ると建設的創造的になり、模倣は新しい形式をとりよほど目的性を帯びて来る。遊びには次第に知的分子が殖えて來つゝはあるがやはり運動的側面の方が勝つてゐる。

又今までよりは意味のある一定した方向に努力し熟練を必要とするやうな活動に努力するやうになる。例へば石けり、竹かへし、おてだまの如き遊びが盛に行はれる。かくて熟練が増して來ると遊戯は著しく個人的競争の色彩を帯び、その競技は最も明らかに子供の本性を暴露して來る。遊戯に比べて競技の數が著しく殖えて來るから競技の規則に服従する必要を生じ、一層仲間を必要とするやうになる。法に對する尊敬心も發達し、法の命ずる強制にも甘じて服するやうになる。しかしながら複雑な大人の

文明社會に行はれる法が兒童の行動を束縛し始めるのはこの期の終りから次期の初めにかけてである。眞の協同は後に至つて發達するので、競技の組織もさほどやかましくなく、團體としての競争よりも寧ろ個人的の競争の方が多い。

この時期に於て如何なる興味が主位を占めてゐるかを調べて見ることは兒童の本能と能力と特質とを知る上に大なる參考となる。まづこの期間に於ける主たる興味は女兒の人形及びまゝ事遊び、組織の嚴密でない鬼ごつこ全部（圓鬼・ため鬼・柱鬼・しゃがみ鬼など）、傳說的遊戯の大部分、簡単な球遊び、蒐集、考へもの等である。走り・飛び・投げ・打つ・木上り等荒つばい活動の行はれるのもこの時代である。

この期の終りから次期の初めにかけて男の子は特に文明人らしくないものになつて來る。年少年長のもの及び異性に對しては勿論同年同性の仲間のためにも計つてやらない。リトはこの時代をビッグ・インチャン時代と名づけた。蓋しこの年頃の子供は「己れは大きなインド人だぞ」といつて威張るところから名づけたので、「お山の大将」時代ともいふべき時代である。丁度この頃の男兒が肉體上に於ても精神上に於ても原始人類と著しく似てゐることは遊戯を研究する人の一致して感ずる所である。この時分の子供は鋭くて敏活で益々巧妙になり、人に依頼せず獨りぎめするやうになり、自分の身體はよく使ひこなし、年長者と遊んでも決して年長者に勝たしてゐかない。十一二歳になると兒群やクラブやチームやその他組織の不完全な團體を作つて、それが主たる勢力を振ふやうになりその結果として遊戯や競技の

數は減ずるけれども持續力を増加するやうになる。以上の如く説明して更に青年期（十三—十六歲）の遊びについても説明してあるが茲にはその必要がないから省略する。

一一

六月下旬の一日正午すぎから一時までの間東京女子高等師範學校附屬幼稚園の幼児達が晝食をすまして自由に遊んでゐるところを各室にわたつて觀察する。携帶品置場から六つの保育室更に廊下及遊戲室、それに外遊びをなす幼児の自由遊を只その有様を觀察するだけにまわつて歩く。約四十分の觀察であり満四歲と満五歲との幼児であるから、ジョンソンの所謂兒童前期（四歲より七歲）の時代のものである。しかも幼稚園生活を初めて二三月しか経過しない幼児ともう既に一ヶ年以上の幼稚園生活をしてゐる幼児とで大分遊び方が違つてゐる。是等の明白な區別はこれを文章で表出することは困難であるから茲にはどんな遊びが行はれてゐるかだけでも明白にしたい。

森の組（満四歲兒）に行くとき男兒四人が専ら一團となつて積木。所謂床上積木を床から机の上に廣げて遊んでゐる。大體は汽車か自動車の如くなつてゐるが、それ／＼一箇若くは二箇の積木を机上にすべらせてゐる。一人は積木を五六箇重ねて家をこしらへてゐるといふ單純なものである。しかし單に積木を以て建物を積むで表出するといふことに興味がなく、動かして遊ぶといふ動的な活動となつてゐる。

この組で寢臺から黒板の前にかけて男兒二人、女兒六人ばかりが莫蔭をしき、その周圍に腰掛を五も六も集めて遊んでゐる。初めは何であるか分らないし、また何の遊びをなしてゐるか尋ねることもしなかつたが、後に見るとも風呂に入るところ。衝立が出て來てゐるといふ有様で、幼兒が家庭に於て行ふ生活を實演するものであることが分つた。尤もこの生活を遊びとなすにも中心になつてゐる女兒が二三人で、他は隨時加はるかと思へば更に他の遊びのためにこの團體を離れるといふ有様で、二三人の女兒と男兒とは附隨的であり移動性のものである、しかしこの生活を遊ぶ事項も四十分同一のものが繼續してゐるのではなく、次から次と變化し移動するものである。只莫蔭と腰掛とが使用せられ、保育室内に於て行はれることが一貫してゐるにすぎぬ。

遊戯室に入つて見ると實習科生徒二三人を中心にして男兒が八人で鬼ごつこをしてゐる。鬼ごつこは簡單なものであるが、まだ幼兒だけで行はれない。それに大人を必要とすることが注意すべき點である。大人が入ると八人も十人も集つて、まとまつた遊びが出来る。けれども幼兒だけでは中々左様には行かぬ。「おにごつこするものよつてお出で」と、年長兒が肩くんでさそつても集まるものは五六人。それも鬼ごつこまでにならないで、駄目になることが多い。大人があつて統制すれば鬼ごつこが出来、多少長つゞきもするが、それでも十分間とたゞぬ中に二三人がぬけてしまつたり、新手が入りこんだりするのが普通である。

四人の男兒がヒルの積木を遊戯室の一方の壁から床上を長くつないでレールとなし更に窓のところまで續け、そこから短い積木を電車にして、しきりに發車したり停車させたりしてゐる。この遊びは四人が一團となつてゐるが、それ／＼電車を一つ／＼つ走らせてゐるから個人の遊びと團體の遊びとが組合さつて行はれてゐる。一方には五人の男の兒がシューターにのつたり下りたりして遊んでゐる。

次に林の組（満四歲兒）に入ると男の兒四人が寢椅子の上にねたり起きたりしてゐる。何を遊んでゐるか判然しない。また女の子二人男の兒五人が床上積木で遊んでゐる。別にまとまつたものをつくる譯でもないが、積んだりくづしたりしてゐる間に電車になり汽車になりしてゐる。

一寸外遊を見るとブランコには女兒七人が遊んでゐる。六人しか乗れないが、一人は横にゐて待つてゐる。入園當初はブランコに乗つても他人に動かしてもらはねばならぬが、満五歲兒になると大抵は獨りで上手に動かしてゐる。それで満四歲兒がブランコを使ふときは保姆の方で動かしてやるか、幼兒相互に動かしてせねばならぬが、満五歲になるとその必要のないのが普通である。スベリ臺には女兒が二人ゐてすべつてゐる。この滑り臺は満四歲兒にむくもので、満五歲になると普通只すべる位では満足せぬ。いろ／＼の變化をさせ、時には危険な位に見えるすべり方をするやうになる。若しそれをさせないときは寧ろ自分で動かして得るブランコに集まる方が多い。

更に遊戯室に引かへして見るとシューターは男兒一人女兒三人に變化して居り、おにごつこが十一人と



なり、中に女兒が三人加はつてゐる。積木を遊んでゐる幼兒は相變らずである。

今度は森の組に引かへして見ると寢椅子のところへ腰掛を持つて來て遊んでゐる男兒が七人に變化してゐる。積木遊びをしてゐる男兒は三人一團となり二人が一組となつて遊んでゐる。それでこれは前の幼兒らしい。いつの間に實習科生徒が三人加はつて幼兒の作つたカルタを男兒八人、生徒三人でやつてゐる。年長の幼兒が第二期に作つたカルタであるが、年少兒でも理解し得る所が多くカルタをとることも出来るものがあるため一通り進行する。寢椅子のところへ女兒が五人來たので、男兒七人と女兒五人、それは大きな分團になつた譯だけが暫くすると男兒がなくなる位に速に變化するのも面白い。窓から外を見ると砂場に男兒が四人。水を運ぶものさかさまになつて一生懸命砂を掘つてゐるものなどである。また六人の女兒がジャンケンをやつてゐる。多分鬼ごつこが始められるのであらう。

山の組（満五歳兒）に來て見ると多くの幼兒はどこかへ行つたが、僅かに二人の男兒がピアノをボン／＼と弾じて居り、女兒二人が食後の後始末をしてゐる。女兒が三人でとりまけ／＼エツサツサと廊下に出て、直に私を取巻いてはなさない。

携帯品置場をのぞくと大積木で軍艦が出來、大砲が据付けられてゐる。砲車係もあり、彈丸を運ぶものもある。軍艦を操縦する係もゐるといふ有様で、男兒が六人それに女兒が一人加はつてゐる。何れも年長兒である。この大積木は幼兒の力で創作的な表現も出來、面白い遊びが出来るので、幼兒には最も

重要にして興味ある遊び道具である。疲れると腰掛ける。何しろ手早く相談の結果が實地に表現せられ遊びの中心となる大積木である。

更に山の組に引きかへすと女の兒が二人、ピアノを弾いてゐる、つい先程男兒がピアノを弾いてゐたが、何處かに去つて女兒が代つてゐる。幼兒の遊びは實に變化極りない。猫の眼よりも速い變り方である。

この室より庭を見ると小學校尋常科一年の女兒が三人來て木蔭で石けりをしてゐる。石けりは一定の法則があり規約があり、中々技巧を要するので幼稚園では行はれない。滿六歳にもなり小學校に入學する前後の幼兒にはとても面白い遊びではあるが、まだ入園したての幼兒には勿論、もう一年も幼稚園生活をした年長兒にもまだ十分うまく石けりが出來ないので、實際に於て行はれない、十一月頃から三月頃まで幼稚園の昇降に白墨で圓い輪が七つも八も書いてあり、一ヶ所でなく二ヶ所にも三ヶ所にも石けりの遊びが行はれるのであるが第一學期にはない。更に幼兒が七八人ばかり帽子をかぶつて外遊びに出て來た。庭にまいてある砂利で遊んでゐる女兒が三人、ざるに砂利を入れてゐる男兒が二人ゐる。庭の砂利でも直に幼兒の遊び材料となり、砂利の上を積木一本横にして汗水たらして汽車ごっこをしてゐる男兒があるから面白い。

更に引かへして携帶品置場をのぞくと大積木の軍艦に乗つて遊んでゐる男兒が僅に二人、他はどこへ

行つたやら。

森の組に来て見ると積木には男児が四人ゐるばかり。カルタの方は男が五人になつてあとはどこへ出かけたか、實習科生徒はとり残された形である。腰掛と莫蔭を中心にして女兒が四人、一人の男の兒は低い小さな衝立に馬乗になつて女兒の遊びを眺めてゐる。この兒は何時でも高いものに登ることが得意。他の幼兒よりは一段と發育がよく、手荒い遊びがすぎである。

遊戯室は大抵の幼兒が出はらつて、シーソーのところは女兒が一人、わくのぼりに女の兒が二人ゐるばかりである。積木をしてゐた男兒も鬼ごつこをしてゐた團體も外へ出かけたと見える。

林の組（満四歳兒）を見ると男兒が五人莫蔭をしいたところで積木をして遊んでゐる。その隣の池の組の入口では男兒が三人で大積木を携帯品置場から引ずつて來てゐる。蟻の材木といつたやうに長い大きな積木を三人の男兒が汗だくになつて引ばつてゐる。どうする積りか知らないが、三人の意志が一致したものと見え、携帯品置場から二十間もある池の組まで大積木を引ばつて行く根氣と努力とは中々大變なものである。

今度は外に出て外遊をしてゐる幼兒の有様を見ると莫蔭を小山の坂にしいて、その上をすべつてゐる女兒が六人ゐる。これは年長兒の方である。その横でまゝごと遊をしてゐる男の兒が三人ゐる。これは不思議と見てゐると女兒と合同のものである。女兒は女の仕事、男兒は住居の手入などをするといつた

有様である。また一方には莫蔭を木蔭にしてお家が出来てゐるが、留守になつてゐる。女兒四人が花壇のところまで草むしりをしてゐる。おままごとの材料を採集してゐるのである。これも年長兒の方である。おままごど遊びを主として遊ぶのは年長兒で、年少兒がお客様になることがあつても主となつておままごどをしない。まだおままごど遊びが充分に出来ないことが分る。自由遊びとなせば組織立つたおままごど遊びが出来ないのである。

砂場には年少組の男五人が一生懸命に砂遊びをしてゐる。五人に統一があるかと思ふとさうでは無い。一人一人勝手な砂遊びをしてゐるのであるが、別に喧嘩をすることもなく時には共同の動作をなし、時には別個の作業をなすといつた所である。別の砂場には年長兒が砂遊び。男の兒が三人づゝ二かたまり。水道から水を運んで来て山の方から流してゐるものがあり、その流れの末に池をこしらへトンネルをこしらへてゐる。この六人の共同の目的がないのであらうが、兎に角砂に水を中心にして面白く遊んでゐるのはとても幼兒でなくば出来ない場面である。砂場の臺の上に積木を立て、遊んでゐる女兒が一人、その横にこなやになつてゐる女兒が二人、煉瓦と煉瓦とをこすつて粉をつくり、それをぬれてゐる砂でこしらへた砂團子につける粉である。水遊びをしてゐるものを利用して池をつくつてゐるのも面白いが、その水でぬれた砂で團子をこしらへてゐる女兒の遊びも連絡があると見れば見られぬこともない。その筈でこの砂場にゐる男兒六人女兒三人は共に海（年長兒）組である。

その隣の砂場を占領してゐるのも山（年長兒）の組。シャベルとあしやもじ、それに積木を使つて山とトンネルをつくつてゐる。積木は汽車となつてトンネルを通る工夫である。男兒五人である。この組の男兒四人砂場の横で砂利を積木でよせてゐる。また二人の男兒はそれ／＼長い積木に馬乗になつて砂利の上を引ずつてゐる。玉のやうな汗を顔に流して一生懸命である。

砂場が年長兒に占領せられてゐるので、年少兒男九人女五人は先生と一緒に日蔭のところへ積木やざるで砂利を集めて遊んでゐる。これは中心に先生がゐるので十四五人の大きな一團である。小學一年生が來て外の流して水道から水を出して積木にかけて水遊びに餘念がない。藤棚の下には男二人女五人、實習科生徒と柱鬼をやつてゐる。わくのぼりには年長兒男三人女四人がのぼつたり下りたり、また金魚鉢の所に行つたりしてゐる。花壇に花をとつてゐる女兒が二人、まゝことの材料にするのである。その横莫塵の上に男三人女二人がすはつて主客の接待中である。何れも年長兒である。また別の組では男四人が粉屋になつて女兒のまゝごと遊の御馳走をつくる最中である。これは女兒が三人、男兒が四人で、自然に出来るまゝごと遊びの團體としては寧ろ大きなものである。その横の莫塵の上では女兒が五人、實習科生徒三人とまはじきをしてゐる。これも勿論年長兒の一團である。

ま屋内に入ると遊戯室には積木で汽車ごつこをして遊んでゐる男六人ゐるだけである。森の組に入ると積木遊びをしてゐるもの四人。かめの鉢をのぞいてゐる男兒二人、そこへ女兒が二人來た。そして

ぞいてゐる中に男兒が龜をつまみ出した。龜は机上を匍出す。さあ面白い。積木を遊んでゐた四人も加はる。積木の上に龜をのせる。二本の積木に二つの龜をのせて競走をさせる。しかし龜は細い積木から落ちる。首を締め込む。積木を橋にしてまた龜をのせて渡らせやうと發起する男兒がゐる。面白い。しかし龜は積木から落ちる。これは駄目である。今度は積木を机にたてかけて龜のすべり臺、龜は首を出してすべり落ち床上に落ちて首を大急に縮込む。面白い／＼で大變な騒ぎ。今まで横でお風呂遊びをしてゐた女兒九人も集つて面白い／＼。こゝにはからず男兒六人女兒九人の大團體で龜三匹と積木とでの面白い遊びが出来るといふ始末である。それも十分間とつゞかぬ。

(口繪、「お砂場」の子供は年長之組の林の組)

